

高岡より侍中大中小身引越被仰出、利長卿御隠居領廿二萬石の内、十萬石分と六萬石分と兩度に侍中引越命ぜらる。此引越家の屋敷地を高岡町といへり。とあり。右引越とあるは、金澤へ引返されし事をいへり。諸士言行録に、瑞龍公致仕領の内十萬石分を返さるゝ時の土町は、今枝民部邊の高岡町なり。また其の後六萬石分を返さるゝ時の土町は、淺野川沙走邊の高岡町なりと云ふ。今沙走邊に其の町名なしといへり。平次按ずるに、右沙走邊の高岡町といへるは、傳聞の誤にて、此の犀川馬場邊なりし高岡町の地ならん。但し十年十六年の兩度に返されしと云ふ説は難信と、三州志にいへり。尙その巨細は惣構内なる高岡町の條に載せたり。

○帶刀町

元祿九年の地子町肝煎裁許附に、法船寺町・帶刀町と並べ載せたり。國事昌披問答にも、法船寺町の次に帶刀町・大豆田町とあり。龜尾記に、帶刀町は、昔此の地に横濱帶刀と云ふ人居住せし故に、町名に呼べるなるべしといへり。按ずるに、舊藩士横濱氏は、加陽諸士系譜に、本國大和。元

祖横濱民部。奉仕于秀吉公。後流牢。於筑後國歿。其子茂元初稱田中左兵衛。後稱横濱半齋。寛永十九年。微妙公被召抱。賜俸五十口米百五十俵。正保三年歿。其子茂吉稱横濱勘兵衛。賜五百五十石爲大小姓組。元祿二年歿。其子茂在稱與八郎。遺知相續。寶永五年歿。其子茂貞稱源藏。後改助右衛門。遺知相續。享保五年歿。無子。以里見治左衛門六男茂濟爲嗣子。稱源八郎。享保八年歿。無子。以小寺武兵衛二男某爲嗣子。稱勘兵衛。寶曆三年歿。とありて、此の後々も帶刀と稱するはなし。慶長以來の土帳等も勘考すれど、横濱帶刀と云ふ人未だ所見なし。殊に横濱氏の居邸は、元祿六年の土帳に奥村伊豫近所尻谷之上とありて、龜尾記の傳説は詳かならず。帶刀町は今元車町に屬せり。

○元車町

帶刀町の末より川下町端までをいへり。按ずるに、此の町名昔は油車町と呼びたりけん。元祿九年の地子町肝煎裁許附に、公儀町・犀川油車とあり。又國事昌披問答には、公儀町・油車町・神谷町と並べ載せたり。三州志來因概覽附録に載せたる享和三年幕府へ進達郷庄分町名附にも、油車町

とあり。されば元車町といふは、近年よりの事なるべし。

○元車來歴

舊傳に云ふ。昔油屋庄兵衛といふ者、此の地なる大豆田用水に、初めて水車を建て、水碓を設け、種油を製造す。是金澤にて水車を設けし濫觴なり。故に元車と呼べり。そのかみ金澤市中に水車を設け、水碓を以て燈油を製する所三ヶ所あり。所謂堅町油車・淺野川水車と此の犀川元車と三ヶ所なりし處、文政二年より松任等の郡地にて製造する事と成り、金澤にて燈油を製する事止みたりし故、右油屋共水車にての製造を廢し、此の元車なる油屋庄兵衛も商業をかへ、紺屋職と成り元車町に居住せしかど、今は其の子孫も絶えたりといへり。按ずるに、右三ヶ所の水車の中にも、堅町油車は正保年中に初めて水車を建てたるよし、堅町油商多田源兵衛の家記に見ゆ。淺野水車および此の犀川元車との起原は、未だ詳かならずといへども、此の元車は、三ヶ所の中にも金澤にての水車の濫觴にて、元車としも呼び來れば、寛永の頃などに初めて設けたるならんか。按ずるに、慶安四年五月小立野石引町波着寺邊に水車を建て、鐵炮の

製藥所出來すと、菅家見聞集等に見ゆ、三州志難獲餘考には、慶安四年夏、小龍野に水碓を設け、烟硝を製せしむ。此の頃、浪人高原一兵衛と云ふ者、粟給を下し賜はらば、此の碓法を獻せんといふを、此の時の銃士和田助右衛門及び大匠山上善右衛門之を考へ作る。是より商家米・油に轆車を用ひて、其の捷利をなす。とありて、堅町油車は正保年中に初めて水車を設くといへば、慶安より以前也。又燕臺風雅に載せたる田中式如の石川郡鶴來酒家水碓銘序に、邑中有一大商。稱米屋。酒家之巨魁也。其家頃年運奇巧。重引彼河流。進之設水碓之術云々。とあれども、此はまた石引町波着寺邊に設けし製藥所の水車とは、遙に後なりしと聞ゆ。されば此の元車の地なる水車は、若し寛永頃の製造ならば、實に金澤市中水車の濫觴にて、元車と稱する事さもあるべし。

○大豆田用水跡

此の用水は、大豆田村の田地を養ふ用水にて、犀川河縁山伏延命院の前より川水をせき入れ、馬場先より大豆田口へ流れしかど、後廢して今は遺跡あるのみ。